シンポジウム発表概要

【日時】　平成 27 年 3 月 9 日（月）14:00～17:00
【会場】　韓国清州市文化産業団地ヨンサン館

＜李承勳市長あいさつ＞

皆さん、お目にかかれて光栄です。本日は、2015 年東アジア文化都市学術シンポジウムの開催を 85 万人の市民と共に歓迎いたします。最初の公演はいかがでしたか？新潟市と青島市の関係者の皆様に感謝申し上げます。また、鈴木浩行さんをはじめとする来客の皆様、中国の青島市から陳立波副局長をはじめとする関係者の皆様、清州にお越しいただき心より歓迎いたします。

清州市は 1500 年の歴史と文化を保持する朝鮮半島の清い町です。世界最古の金属活字本チッチ（直指）を発刊し、世界最古の清州ソロリ種籾が出土するなど、生命と文明が共存する都市です。生命と文化の価値は、オソンバイオ産業団地と清州先端文化産業団地を通して活性化され、「清州国際ビエンナーレ」と「清州直指祭り」などの多様なイベントを通して、感激の波を起こしています。

上党山城（サンダン・サンソン）、世界 3 大鉱泉水である椒井薬水（チョジョンヤクス）、歴代大統領の別荘だった青南台（チョンナムデ）など数多くの歴史的観光資源があり、博物館、美術館、図書館、公演会場などの文化基盤施設では、市民参加の文化プログラムを盛んに展開しています。清州市はこのような文化特性と資本、人の価値がひとつになり、東アジアの新しい地平を開きます。中国の青島、日本の新潟と手を取り合い、文化でひとつになり、芸術によってすてきな夢を広げていきます。

東アジア文化都市事業説明

＜清州市　李承勳市長＞

清州市が準備した東アジア文化都市事業について申し上げます。清州市は、1500 年の歴史文化コンテンツを特殊化し、市民の自負心を高め、地域文化のグローバルを通して未来の幸せを引き出すことを核とします。

事業概要について申し上げます。全体のテーマは生命の大合唱です。清州ソロリ種籾からオソンバイオに至るまで生命の価値を重視し、これを文化芸術として昇華させることです。

事業内容は公式行事、特別行事、連携行事、そして生命都市の中長期プロジェクトで展開します。夏には東アジア文化週間を通して学術、展示、公演など多彩に展開します。政府による「文化の多様性の日の行事」なども連携して推進することになります。そして今年が初開催の「文化の多様性の日」は、清州をはじめとして全国の多様な文化をひとつに集めます。

「箸フェスティバル」というとコンセプトがよくつかめないでしょうか？日中韓には、どんな共通点がありますか？箸からお互いの共通点について考える「箸フェスティバル」を準備しています。

冬には「東アジア市民フェスティバル」で今年の事業を締めくくり、新しい出発をお約束します。今回の東アジア文化都市をきっかけに文化体育観光部では、日本と中国と一緒に行う様々な行事があります。「日中韓芸術祭」は中国の青島で開催します。「日中韓文化芸術教育ファーラム」も青島で開催されます。

その他にも開発途上国の文化芸術の専門家を招待して「文化パートナー事業」を展開します。清州が東アジアを越えて世界に跳躍する事業になるでしょう。

連携行事には今年、清州で様々な行事が開催されます。「清州芸術祭」「椒井薬水祭り」「清州民族芸術祭」「清州邑城大祭り」「清州国際工芸ビエンナーレ」など多彩な祭りと共に連携協力事業を推進し、「直指グローバル化事業」も展開して行きます。

そして、この場に光州市と全州市も参加されています。前回、東アジア文化都市だった光州とも協力して、昨年開催した３都市、今年の３都市が連携して行う事業も展開する計画です。

次は生命都市の中長期プロジェクトです。東アジア文化都市の事業が一過性、イベント性に終わらないようにします。清州の文化価値を世界、そして未来へ広げ、市民を幸せへと導きます。そのために中長期プロジェクトを 5 月までに準備し、生命文化都市、生命資本として育てていきます。具体的な推進内容を見ると、生命の空間を育て、生命文化を分かち合い、生命経済を伸ばして、生命価値を整える事業を準備するものです。李御寧名誉委員長が理事長を務める日中韓比較文化研究所でマスタープランを打ち立て、５月ごろに全体的な案を出し、その案を中心にして積極的にこの事業を持続させていきます。具体的に出た事業を見ると、「言語の障壁のない町づくり」「東アジア創意学校」「ホームカミングデー」を準備しています。たくさんの清州出身の芸術家たちと市民が一緒に、新しい夢を広げていくことができる事業も構成しています。

その中でひとつ「言語の障壁のない町づくり」について申し上げます。先月 BBB コリアと業務協約を結んだもので、先達て報道された資料があります。20 カ国語ほどの言語を提供する通訳システムで、清州を訪問した際、このシステムを利用することによって意思疎通の支障をなくそうというものです。これは、全国で初めて試みるものです。清州市は、できるだけ早くこのシステムを導入するよう努力します。

その他にも「清州市民ストーリー博物館」「東アジア地元市場」「デジログシティプロジェクト」などが展開され、清州圏地域の工芸村を生命工芸デザイン村として造成する事業を展開します。清州市民が自慢したい様々な歴史があると思います。「清州市民ストーリー博物館」は、市民の自慢の種を展示する計画です。今後、清州市民がどのように暮らしてきたかを知る貴重な博物館になるでしょう。

このために、李御寧名誉委員長をお招きして多様な政策会合をもち、市民中心の事業を展開するための市民委員会制度を導入する予定です。

広報マーケティング戦略です。東アジア文化都市事業を広く知らせるために、日中韓３国と協力し、推進します。

次の表は、文化都市に指定された都市で今年、それぞれどのような行事が展開されるかを分類した資料です。清州市では公式行事、特別行事、連携行事、中長期プロジェクトを推進していくため、今年は豊富な東アジア文化広場が開かれます。私たち清州市民の偉大さを、東アジアがひとつになることをこの機会に世界へ知らせようと思います。そして更

に前進して、清州を大韓民国代表の文化都市にし、東アジアと世界を舞台に創造経済、文化隆盛、市民の幸せを引き出していきます。ご清聴ありがとうございました。

2014 東アジア文化都市成果と課題

＜光州広域市　申旼錫チーム長＞

2014 東アジア文化都市の光州の推進および発展方針について発表します。今日は、PPT を準備できなかったため会議資料をもってかえさせていただきます。光州市は 2013 年５月、東アジア文化都市として選定された後、同年７月、東アジア文化都市推進委員会および事務局を発足しました。東アジア文化都市の形成という目標を設定し、３都市が会議を通して多様な交流行事を計画し推進しました。

光州市、泉州市、横浜市間での 2014 年、交流実績と成果について要約して申し上げます。2014 年３月、光州開幕行事をはじめとして９月まで日韓中の芸術祭、青少年文化交流など様々な年中行事を開催しました。10 月と 11 月に集中交流期間を設定し、「7080 思い出の忠壮祭り」「光州―泉州民間観光交流」「3 つの都市の閉会行事」など大小の文化交流を成功させ、光州の文化の力量を対内的に確認するきっかけになりました。

各国の文化都市が共に友好協力都市を締結して、持続的に友好協力ネットワークを構築しました。以後、光州がアジア文化の中心都市として、未来ビジョンをリードすることができる可能性を見つけだしました。

開幕行事、日中韓芸術祭、閉幕行事は、開催都市の市民が観客席をぎっしりと埋めるなど、熱い反響の中で開催され、その他の交流行事、また青少年、大学生など各界各層から文化交流、学術セミナーに参加していただきました。

光州市は昨年、日本の横浜市で開催された日中韓文化大臣会合の合意事項と３都市の友好協力都市協定の実行のために、今年も日中韓文化都市と多分野の継続的な文化交流事業を推進していきます。

指定発表

＜清州市　李宰僖忠清北道文化芸術フォーラム代表＞

皆さんもよくご存知だと思いますが、現在、李承勳市長が目指す市政の目的は、忠清北道を豊かに暮らす、最も発達した経済の都市に育てるとおっしゃいましたが、これは、ちらっと聞くと経済、または成長第一の清州を目指すことではないかと誤解する方たちが多いです。しかし、私が理解するところでは、21 世紀に最も豊かに暮らすことの中核とは何かとすると、むしろマックスが経済という下部構造に文化が成長すると提唱しましたが、21 世紀はこれを逆にして、文化を下部構造にして経済が成長するモデルを選択しています。まさにそれが、李承勳市長が目指すものだと理解し、そのために文化都市というものを選んだのだと思います。そのような意味で、始まりに開幕式の行事のシンポジウムがあることは、とても意味があると思います。本日、発表のためお越しくださったすべての方たちに深く感謝申し上げます。まず、写真は順番に出て、発表順は別に決められています。最初は韓国で、清州を代表して金洋植博士から発表していただきます。

＜清州市　金洋植忠清北道発展研究院主席研究員＞

旧石器時代から人々は集まって暮らし、多様な歴史文化の花が開きました。清州の姿は平面的な一面体でなく多面体にあるので、多様なイメージを持っています。そして、イメージのひとつとして、生命の価値に注目し、生命文化都市を目指しています。果たして清州は生命都市としての発展が可能か？歴史からその答を探してみました。そして、やはり清州には、そのような文化遺伝子を名実相伴う歴史の中心地域として位置づけする出来事がありました。地域性とアイデンティティーは固有文化と外来文化の関係の中で形成されました。そのような意味で西原京（ソウォンギョン）は、清州の地域文化がアイデンティティーを確保したきっかけになり、地域の境界を越えて他文化と交流し、発展する基礎が出来上がりました。それ以後、清州地域は韓国の新しい歴史が展開されるたびに中心に立ち、その都度、地域文化が発達しました。940 年からは、清州という地名を使用することによって、場所のアイデンティティーも確保するようになりました。

それが可能だったのは、すべての生命を神のように接する東学の伝統があり、伝統文化と外来文化の接合を通して地域文化を創造させようとしたためです。これは、清州が生命文化都市として歩む道において、顧みる歴史的価値だと思います。

一定の文化生態系を成したことは、三国時代以後 2000 年の歴史を作りあげました。その過程で蓄積された歴史の経験と文学が無形の文化資産であり、現在残されている文化遺産は、有形の文化原型を作りあげました。これは清州が生命文化都市として歩む道を開いてくれる貴重な財産だと思います。3 大清州文化遺産に注目する必要があります。まさに「清州ソロリ種籾」「直指」「胎教新記」です。「種籾」とは、東アジアの主食である米の種子です。清州の五倉（オチャン）で発掘された「清州ソロリ種籾」は、1 万 7 千年前の種籾です。「清州ソロリ種籾」は、生命の源であるご飯の価値を明らかにしてくれる貴重な地域財産です。

1377 年に製作された「直指」は、生存している最古の活字本として、2011 年にユネスコ世界遺産に登録されました。このために清州は、「直指」の町と呼ばれ、国際ビエンナーレが開かれています。地域の「直指」の価値は、金属活字本において、内容の価値も新しく注目しなければなりません。「直指」が印刷された時期は、社会が極度に墜落し、民衆は塗炭の苦しみに陥り、苦難の時代を過ごした時でした。そんな時代に「直指」は、すべての生命を生かし、新しい関係を築くための手段として、当時の最高の知識と技術を動員して作られた時代の光と小曲でした。「直指」こそが、生命文化の花だといえます。その価値を再発見するためには、「直指」の文化的な討論の場を再設定する必要があります。

「胎教新記」は、1800 年に著作された世界最古の胎教本です。今も胎教関連の必読書として読まれています。この本を著作した人は、清州出身の師朱堂李氏（サジュダンイシ）です。胎教は生命文化の始まりです。師朱堂李氏が述べたように、人間は母親のおなかの中にいる時に決まります。胎教は、真の生命、正しい人類社会を築く出発点であると同時に基本です。

このように、世界最古の清州の 3 大文化遺産だといえる「清州ソロリ種籾」「直指」「胎教新記」は、古い歴史を経て残された遺産です。その遺産を基盤として、これから清州市がやるべき課題はまさに、潜在する遺伝子を探し出し、刺激して活性化させることです。このような歴史的な流れの中で清州はすでに、生命都市としての生命力と可能性を見せて

います。

工芸都市など、様々なブランドで呼ばれてきた都市は、一方では文化の多様性を見せてくれるが、その反面声を大にして言えるアイデンティティーが弱かったという証拠でもあります。それはまさに、市民中心の健全な疎通の問題です。市民がどれだけ共感し、疎通できるかがアイデンティティー確立の重要な基準になります。生命都市の名で成り立つすべてのことが、未来の価値を持続可能にするよう創造しなければなりません。現在推進している「清源生命祭り」や「清州国際工芸ビエンナーレ」などは、生命文化を中心にして、清州だけのオーラを作り出さなければなりません。そのためには、市民がストーリーテリングを通して物語を作るべきです。生命都市として歩む道は、最終的には物質から精神価値に重心を移動しなければなりません。生命の愛の価値体系と地域の多様な文化要素が地域主体と結合し、市民を幸せにする生命都市として昇華され、日常化するべきです。これはおそらく生命文化都市として歩む最終的な到着地点ではないかと思います。清州が東アジア文化都市に選定されたことをきっかけに、グローバル生命文化都市として大きく飛躍することを願いながら発表を終わりたいと思います。

＜青島市　陳立波文化メディア新聞出版局副局長＞

青島市は 863 キロの海岸線、49 の港湾及び 8 つの公共海水浴場を持ち、夏の平均気温が 24 度、冬の平均気温が 0 度以上という極暑も厳寒もない気候で、山・海・都市が抱き合うことにより、「赤い煉瓦・緑樹・青い海・青空が共存している」という独特な風貌となっています。同時に、青島市は豊かな海洋歴史文化資源を持っており、秦の時代に徐福氏が琅琊台から東へ海を渡ったことは日韓、日中文化交流の先駆けとなり、唐と宋の時代に、板橋鎮が日中韓交流の主要港となったことで、古代の青島は日中韓海運文化交流の重鎮となっていました。媽祖文化祭や周戈庄海祭事等の海洋祭りは海洋民俗文化を受け継いでいます。現在、青島市には全国 30%の海洋研究機構が集中し、全国 40%のハイレベルの海洋科学研究者が在籍しているため、青島市が中国海洋科学研究の中心と言えます。

青島市は古代の斉国と魯国の領土に当たる場所に位置しているため、斉国と魯国の文化が都市文化の厚いバックグラウンドとなっています。唐と宋の時代以降、青島は次第に儒教・仏教・道教が共存しているという共栄共生の状況となりました。また、青島が近代中国文化と西洋文化が比較的に早く融合している町により、「万国建築博覧会」という美称を持っています。中国文化と世界文化が融合しているものは青島市独特な文化品格となっています。青島市には 18 の国指定重要文化財、2 つの有名な中国歴史文化通り、11 の国家無形文化遺産代表作があることから、青島市が奥深くて多様で活力のある文化を持っていることが伺えます。

青島市は「バイオリンの島」という美称も持っており、音楽と深い歴史的つながりを持ち、明の時代に即墨出身の王邦直氏は音律の鼻祖で、「音楽界の孔子」と呼ばれています。中国最初のバイオリンも青島市で作られました。現在、国際音楽界では名高い呂思清氏、李伝韻氏、王亮氏、劉揚氏等の著名演奏家は青島市出身です。「中国国際バイオリンコンクール」や「中国青少年バイオリンコンクール」と「国際音楽大師クラス」等国際レベルの音楽コンクールの開催は青島市に中国と世界各国との音楽国際交流の最前線に立たせており、青島市交響楽団も数回にわたって日韓で公演し、「音楽の島」の魅了を発信しました。

青島市は西洋映画が最も早く中国に入った町の一つです。青島市は「天然の撮影スタジオ」と呼ばれ、毎年 200 余りの撮影クルーは青島市で映画やドラマをロケしています。また、青島市は「名俳優・女優の揺籃」とも呼ばれ、唐国強、倪萍、夏雨、黄暁明、黄渤、範氷氷、陳好等映画界で活躍しているスターは全員青島市出身です。

青島市は中国で最も早くヨットスポーツを始めた町の一つです。青島市は 2008 年オリンピック、パラリンピックのヨット試合の開催都市だったため、人々はここでヨット試合の素晴らしさを身近に感じ、中国初のヨット試合金メダルの誕生を見守った。青島市は既に世界三大ヨットレースであるクリッパー・ラウンドザワールドレース、ボルボ・オーシャンレースとアメリカスカップと連携しており、郭川氏が乗っていたヨット「青島号」は中国人初の一人で連続地球を回る航行の壮挙を実現し、アジア人初の世界最高レベルの地球を回る航海試合を完成した参加者でもあります。

青島市は世界 200 余りの国家・地域と経済貿易往来と友好協力関係を持ち、特に日韓との交流が最も緊密で、日韓両国とも青島市に総領事館と準官庁貿易機構を設立しています。また、青島市は 11 の日韓都市への直行フライト路線を開通しており、週に 200 以上の往復便が運行されており、既にフライトが「バス化」となっています。また、青島市は日韓の 11 の都市と友好都市或いは友好協力関係都市を結んでいます。更に、青島市は年に平均 110 余りの対外文化交流活動を行い、「ナンタ（乱打）」や「チュニャンジョン（春香伝）」等日韓の有名芸能団が多数回にわたって青島市で公演してきました。

青島市は世界 200 余りの国家・地域と経済貿易往来と友好協力関係を持ち、特に日韓との交流が最も緊密で、日韓両国とも青島市に総領事館と準官庁貿易機構を設立しています。また、青島市は 11 の日韓都市への直行フライト路線を開通しており、週に 200 以上の往復便が運行されており、既にフライトが「バス化」となっています。また、青島市は日韓の 11 の都市と友好都市或いは友好協力関係都市を結んでいます。更に、青島市は年に平均 110 余りの対外文化交流活動を行い、「ナンタ（乱打）」や「チュニャンジョン（春香伝）」等日韓の有名芸能団が多数回にわたって青島市で公演してきました。

過去を振り返ると、青島が日中韓文化交流において積極的役割を果たせていたのは歴史が我々に与えてくれた機縁です。未来を展望すると、青島は「東アジア文化都市」の牽引役になって文化交流を拡大することにおいて更なる役割を果たしていきたいです。このために、我々は念入りに準備を進め、「東アジア意識、文化融合、相互鑑賞」の核心理念を巡り、「共生、革新、協和」という念願を高め、2015 年東アジア文化都市活動方案を最適化し、東アジア文化都市をテーマとした各種文化活動を成功させ、それらの活動を多様的文化風情として現し、特色のある文化魅力を体現し、東アジア文化成果の共有を促進する盛会にしたいと思っています。また、我々も「東アジア文化都市」をきっかけに、施設建設の力と政策保障を強化し、財政資金の投入を拡大し、長持ちで幕が下りない新たな文化建設の高潮を引き起こしたいと思っています。

最後に、3 月 29 日に東アジア文化都市青島市の開幕式もいよいよ開催されますので、皆様のお越しを切実に楽しみにしております。ご清聴ありがとうございました！

＜新潟市　鈴木課長＞

現在の新潟市は 2005 年に政令指定都市に移行しまして、8 つの行政区で地域の個性を生

かしたまちづくりを進めています。昨年末で人口は 81 万人。清州市と似たような都市規模になっています。新潟市は、かつて日本全国を回る北回りの最大寄港地として栄えました。盛んな交易により、“おもてなし文化”が発達し、また料亭文化などが発展しています。

はじめに、米を中心とした豊かな食文化についてです。1950 年頃までは地図にない湖と表現されるように、深い田で腰まで水に浸かりながらの過酷な農作業をやってきました。しかし私達の先人達は、厳しい水と土の闘いを乗り越え、世界トップレベルの排水技術を活用しながら、今日の美田を作り上げました。そして米の安定生産を実現してきました。そして四季折々の豊富な食材を和食として日常的に家庭や、飲食店でも食されております。この他に、日本酒、そして味噌、醤油などの醗酵食、米菓などの米を素材とした多様な加工食品など、食品加工技術も優れております。新潟市では、世界に誇れる食文化を活用した創造的なまちづくりを進めていきます。

市内では様々な食や酒を基軸にしたイベントが行われております。例年 2 月では“にいがた食の陣”が開催されております。市内４会場で地元の食材を工夫したメニューなど、たくさん提供されて多くの方で賑わっています。そして 3 月には 90 の蔵元が集まって、地酒 500 種類が一堂に会してのお酒のフェスティバルになっています。2 日間で約 10 万人の方が来場します。また、食に関する国際コンベンションも数多く開催しています。2005 年から、食花の世界フォーラムを開催し、隔年で国際シンポジウムを行うほか、食の販路拡大に繋げる「国際見本市フードメッセ」を毎年行っています。また、シンポジウムに合わせて、日本初の食の顕彰事業として、新潟市の産官学の共同で創設した「食の新潟国際賞」の授賞式も行っております。

都市と田園が共存する新潟市ならではの、「にいがたモデル」の教育ファームの取り組みです。市街地にも近く、自然豊かな潟のほとりで、日本初の食と花を一体的に学べる「食育・花育センター」のほか、「動物ふれあいセンター」「こども創造センター」を整備し、子どもたちや市民に対して、食や花など、本市の特徴を活かした多様な体験の提供や交流を育んでいます。

また、市内でも特に農業が盛んな地域に、これも日本初の公立教育ファーム「アグリパーク」を整備しました。合わせて、教育委員会で学校の授業と農業体験を結びつけた「アグリ・スタディ・プログラム」を策定し、アグリパークを中心に全小学校で農業体験学習を行っています。子どもたちの「生きる力」を向上させるとともに、子どもたちを新潟の農業を応援する人材として育て、農業の活性化につなげるモデルづくりを進めています。

新潟市の宝とも言える食を活かし、食産業の次なるステージを築くべく立ち上げたのが、「新潟ニューフードバレー構想」です。 「農商工連携」、「食産業の集積・創業」、「高度な技術・研究開発、人材育成」、「食品リサイクル」、「ブランド力と情報発信」、「フードデザイン」の６つの柱から構成されています。 基幹施設を中心に、産学官のネットワークを生かしながら取り組みを進め、農業を含めた食産業全体の、成長産業としての発展を目指します。

次に、市民力に基づく水と土の文化創造の取り組みです。２００５年の広域合併を経て誕生した新・新潟市において、新たな共通のアイデンティティーを模索し見出したのが、本市独自の「水と土の暮らし文化」です。この「水と土の暮らし文化」に光を当て、磨き上げるため、「水と土の芸術祭」を２００９年からスタートしました。３年に１回の開催で、

今年で３回目。今回は、東アジア文化都市のメイン事業に位置づけて実施します。 招へい作家らの作品制作・展示を中心としたアートプロジェクトはもとより、市民・地域主体で企画運営する市民プロジェクトが大変盛んに行われるのもこの芸術祭の特徴の一つです。前回２０１２年には、１３０を超える市民プロジェクトが行われ、伝統芸能の掘り起こしやアーティストとの交流など、市民が主体的に芸術祭に参画しています。

また新潟市には、優れた踊り文化や舞台芸術があります。３００年前の「４日４晩踊り明かす怒涛の祭り」を市民の手で復活させた「にいがた総踊り」、日本初にして唯一のレジデンシャルダンスカンパニー「Noism」、また、日本舞踊市山流の宗家など、多彩な踊り文化が根付いています。

新潟市は、創造都市の世界的トップランナー、フランス・ナント市と姉妹都市提携を結んでおり、２０１０年からナント市発祥の「ラ・フォル・ジュルネ音楽祭」を開催しています。独自のエッセンスを加えながら継続開催し、今や新潟の春の風物詩として定着しています。

１９９８年に開館した、このりゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館は、３つの専用ホールをもち、音楽芸能活動の拠点として、市民の創造活動を支えています。

文化の創造性をまちの活力につなげる取り組みです。多数の著名なマンガ家を輩出し、マンガ文化が根付いている本市では、マンガを文化の柱の一つに位置づけて施策展開しています。マンガコンテストの実施など、マンガを描く文化を振興するとともに、アニメ・マンガフェスティバルの開催などにより、にぎわいづくりや中心市街地の活性化、交流人口の拡大を図っています。

また、新たな夜の文化として、光のアート・プロジェクションマッピングをはじめとする光の演出に積極的に取り組んでいます。市内中心部にある重要文化財などに、まさに「光を当て直して」掘り起こすとともに、新たな魅力を付加してまちの活性化を図ります。

新潟市は、２０１５年の東アジア文化都市開催を契機に、より一層、市民力に基づく創造的で持続的なまちづくりを着実に進め、文化を基軸に発展し、世界に開かれた東アジアの交流拠点となるよう取り組みを進めます。

ご清聴ありがとうございました。

＜清州市　李宰僖忠清北道文化芸術フォーラム代表＞

「水と土の芸術祭」を通した発表でした。このイベントは私が知るところによると、開催されてからまだ年数が浅いにもかかわらず世界的なイベントになっています。その理由は何かというと、イベントを行う際に都市の特性を「水と土」として捉えました。きれいな水と土を土台にした米作り、日本でいちばんおいしい米が出来るところが新潟だそうです。また、同じく水と土を土台にした多くの食文化の中で酒、日本で有名な酒のひとつも新潟産です。先ほど聞いたように、味噌やしょう油のような基本的なものも水と土が土台となって日本の食文化の基礎になっています。そのような文化から農業をテーマにして、新潟のアイデンティティーにひとつの軸を立てました。

本日、私が望むことが何かというと、清州市民が文化都市の清州としてのアイデンティティーについて誇りを持ち、それを共有しながらアジア的な価値、グローバル的な価値として、どのようにして一緒に未来を作っていくかについての悩みと情熱を共にできれば、

と再び願っています。
　皆さん、鈴木浩行課長に盛大な拍手をお願いいたします。それでは本日、最後の発表をされる能登剛史さんを紹介します。

＜新潟市　能登剛史新潟総踊り祭り総合プロデューサー＞
　皆さんこんにちは。新潟市からやって参りました能登と申します。どうぞよろしくお願い致します。本日は貴重な機会を頂きまして皆様の前でお話させて頂くのもご縁に思っております。
　これからですね、私が関わっております、新潟市で毎年 9 月に開催されている『新潟総踊り』、踊りの祭りと、日本中の伝統芸能が一堂に会して集めるイベント、『アート・ミックス・ジャパン』というイベントについてまずはご説明させていただきながら、最後には東アジア文化都市への可能性と、そして発展に期待する想いをお伝えさせていただきたいな、と思っております。本来ですと動画を準備させていただいた方がイメージが伝わりやすかったかと思うんですけども、写真にてお伝えさせていただきたいという風に思っております。
　新潟総踊り祭り、今年で 15 回、14 回目を迎えます踊りのお祭りとなっております。Jazz、HIP-HOP、Classic、日本で言うところの民謡でしたり、地域の伝統的な踊り。踊りであればどんな団体でも参加出来ます、という踊りのお祭りが今年で 220 団体、参加人数で 1 万 5 千人、観客動員数は約 25 万人を数え、さまざまな踊りを、同時にこのイベントの中で実施しています。
　先ほどから市民力という言葉が出てきますが、私達の経験の中で実感しているところがございます。
　それは、“文化”という言葉、皆さんどういう風に捉えられておりますでしょうか？あまりにも漠然とし過ぎまして、例えばそれは習慣であったり、風習的なものであったり、様々な価値観であったりという風に大きくは非常に大きなイメージとして捉えられているのが、皆さんの一般的な考えかと思います。
私達市民のレベルこういった文化を勉強しながら、そして手作りでその歴史をなんとか現代風にアレンジをしてたくさんの人達に広げていこうという風に思って経験している、今唱えました、この“文化の力”というのを、人を動かす、人の心を動かす力という風に捉えています。
　心を動かす力、さて皆さん、何が一番あるでしょう？一番わかりやすく言いますと、“愛”という言葉になりますね。人を思いやる気持ち、または尊ぶ気持ち、または尊敬する、様々な思いやり、そして気を遣う気持ち、またはお互いに協調し合いながら高めあう気持ち。そういったものも同じく人の心を動かす力となります。そういった心を大事にしながら、人々に私達は踊りという手段、それは言葉を超えたカタチで体で表現が出来る手段、表現としてこの祭りを維持、継続させていただいております。
　これから東アジア文化都市、様々な国、そして言葉の違う、そして文化の違う、感性の違うことが多々あるかと思いますけども、心を動かす力をお互いに考えながら、そしてお互いに実践し合うことで新たな文化として 3 点が面になるような、東アジアの文化、プランとがこの 3 都市からスタートすることが出来るのではないかと期待しております。

写真を少々お見せさせていただきたいと思いますけれども、踊っているのはですね、下は幼稚園から上は 85 歳のおじいちゃんまで、年齢層に偏りはなく、小学校の授業課、大学の単位課にもなっております。

福祉施設では、お年寄り達がですね、健康寿命を延ばそうということで“健康体操”というのを行政と一緒になって制作をしまして、普及に努めております。これからさらに海外での公演、そしてまた日本全国での公演なども通じながら新潟の魅力を伝えていきたいな、という風に思っております。

そして最後に、『アート・ミックス・ジャパン』というイベントをご紹介させていただきます。新潟市にはですね、「りゅーとぴあ」という施設がございます。コンサートホール、そして劇場、能楽堂。能楽堂は日本古来の劇場施設でございますけども、この施設を活用しながら、日本の伝統芸能、例えば歌舞伎でしたり、または狂言といわれるもの、昔ながらのお笑いのようなものですね。そして三味線、音楽です。そしてこのような物を使った神楽といいますけども、地域地域に残る伝統的な芸能。そして昔ながらに、約 400 年、500 年以上前に途絶えてしまったようなのを復活をさせている、そして今も、現在も残る日舞という日本古来の踊りですね。そして人形を使うこのような伝統芸能。太鼓の演奏と三味線の演奏をコラボレーションするコンサート、音楽。そして影絵などの古来の伝統芸術。

こういったもの、日本でもですね、若者達が伝統芸能に触れるか、といいますと、やはり触れにくいというのが現実的な問題となっております。特に子ども達に至っては、日本の伝統芸能に歌舞伎があることを知らない。

言い換えれば、先ほどもお話しましたように、文化の力というのは心を動かす力となります。日本人が日本の文化を知らないということは、日本人の心を忘れていくことにも等しい、という風に感じているんですね。それを課題点と致しまして、この、できるだけ敷居が高い、要は、とっつきにくい、昔のものだからカッコよくない、と言われているものをわかりやすく、楽しみながら、そして学べるという３つのコンセプトに基づいて、アート・ミックス・ジャパンでは合計 47 の先ほどご紹介した伝統芸能が１公演 45 分間、金額で言いますと、伝統芸能を観ようとすると大体ですね、５千円～１万円位かかるんですけれども、それが１千５百円～３千円以内での手軽な金額で観ることが出来ます。

そういった形で出来るだけ庶民に親しみやすくする為の心を動かす力、これが東アジア文化都市の中で、３都市間の中で大きく可能性を開くきっかけとなっていただけたら非常にうれしく思います。ご静聴ありがとうございました。

＜李承勲市長あいさつ＞

文化都市になるには、このようなことをしなければならないのですね？本日、新潟市と青島市が、今後の都市についてそれぞれ紹介してくださり、またこれから、どのようなプログラムを進めていくかについて、とてもいい発表をしてくださいました。今回、たくさん準備をされたようです。皆さん、新潟市と青島市がどんな都市なのかお分かりいただけましたか？

そして意味深いことは、都市を育てていくにあたって、文化的な都市全体の発展について重要な発表をたくさんしてくださったことです。そこで、私たちがアイディアを得ることができると考えます。このようなことが、お互い文化的な交流をする理由ではないかと

思います。

「新潟という都市をこれまでよく知らなかったが、新潟という都市がそのように活動しているんだな。青島という地名は知っていたけど、具体的な内容を詳しく見てみよう」そして、清州を文化都市に選定されたことをきっかけに発展させる過程で、どのように交流していくかについて、いいアイディアを得ました。そして本日、すてきな発表をしてくださった新潟と青島の代表の方々に感謝申し上げます。お疲れ様でした。

そして、清州が誇る財産が何なのかについてご存じない方々もいらっしゃるかと思います。私たちのテーマが「生命」でしたね？本日、生命とつなげて、どのような都市に育てていくかについて考える機会になりました。今回の東アジア文化都市では「生命」というテーマを持って活動しています。文化的、経済的に成長しようということですが、結局は暮らしている人たちが幸せに過ごそうということです。これは、すべて生命とつながっています。あちこちで暮らしているそれぞれの生命を健全に、とても健康に暮らせる自然環境、経済、文化が三位一体となった時、完全な生命体として世界を完璧に生きていくことができるのではないかと思います。

「清州市は、他の都市と違ってこのような面で特徴がある。だから私たちが育てていかなければならない。」そのような意味で今回、「生命」というテーマで始めました。今年で終わるのではなく今後も保ち続けて、清州市民の頭の中にずっと、どんなことをしたのか考えるようになれば、清州市が本当に住みやすい都市になることでしょう。